

FLORA

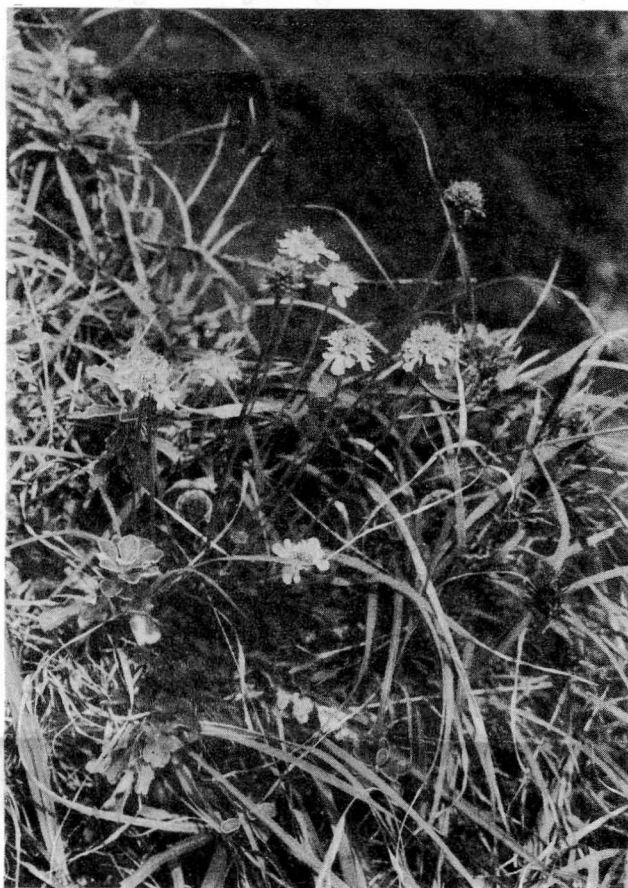
KANAGAWA

神奈川県植物誌調査会ニュース 第15号

231 横浜市中区南仲通り5-60 神奈川県立博物館内
神奈川県植物誌調査会(振替口座 横浜3-10195)
TEL.045-201-0926

DEC. 20. 1983

No. 15



三浦半島のソナレマツムシソウ

マツムシソウ *Scabiosa japonica* Miq. は箱根丹沢の高地に分布し、かつては鎌倉付近の日当たりのよい草原にも自生していた。ここに紹介する種類はその海岸型でソナレマツムシソウ *forma littoralis* Nakai という。草丈は低く高さ25—40cm、葉は基部付近に集まってつき、

葉身は羽状に全裂し、質厚く光沢がある。花柄の長い特徴はマツムシソウと同じである。本品種は千葉県と神奈川県に分布し、海岸の断崖地に生える。写真は三浦半島で撮影したもので、メッシュはY0-4、個体数は少なく、30個体ほどが観察されたのみである。自生地のご教示をしてくださった永田芳男氏にお礼申し上げる。

(高橋秀男)

相模川河口のウスゲチョウジタデ

相模川河口の東岸には小さな干潟があり、多くの水鳥が渡来することは、皆さんご存じのことと思います。今から5年ほど前まで、この干潟の後背地のオギ群落の中に小さな池があり、コガマやサンカクイなどが生えていました。1973年9月27日に、この池の周辺で数種類の植物を採集したのですが、その時チョウジタデと違って採集したものが、標本を検討したところ、ウスゲチョウジタデという別種だとわかりました。

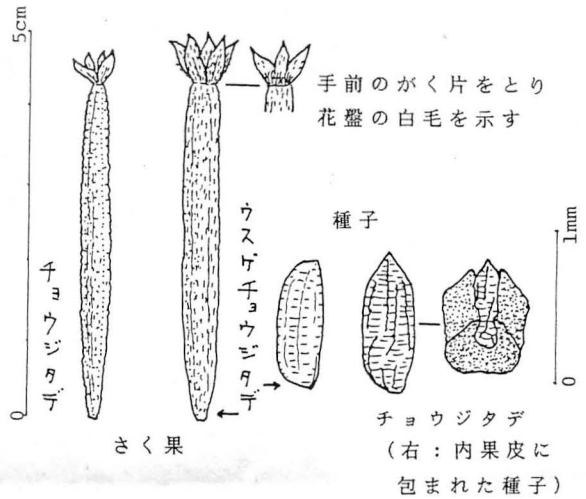
ウスゲチョウジタデは、どの図鑑にも図示されていないので、なじみの薄い植物ですが、チョウジタデにそっくりで、若い葉に細毛が多い点などが異なっています。もっともわかりやすい区別点と思われるさく果の形態を表と図で比較してみました。

さく果の形態の比較

	チョウジタデ <i>Ludwigia prostrata</i>	ウスゲ チョウジタデ <i>L. greatrexii</i>
萼裂片	通常4個 長さ2~3mm	通常5個 長さ3~4mm
花盤	殆ど無毛	密に長い白毛
断面	通常4室で、種子は各室に通常1列に並ぶ	通常5室で、種子は各室に1~2列に並ぶ
種子	1個(まれに2個)つつ海綿状の内果皮に包まれる 紡錘状で一端が尖り長さ0.9mm 紫褐色の縦線が目立つ	内果皮と遊離している 長だ円形で長さ0.8mm 淡色で縦線は不明瞭

ウスゲチョウジタデの生えていた池は、その後付近で行われた工事の影響でもう残っていません。ここで採集したものの中にはイガガヤツリも含まれており、なかなか面白い所だったのだなと、なくなったことが今になって惜しくなりました。

なお、標本に目を通していただいた高橋秀男先生に感謝いたします。



標本データ 1973年 9月27日 平塚市須賀(相模川河口東岸) 浜口哲一 標本番号H C M - 56-233 (メッシュ H I - 3)

(浜口哲一)

ウスゲチョウジタデその後

前報で、相模川河口のウスゲチョウジタデのことを報告しましたが、植物誌調査でチョウジタデとして収集された標本を注意して見直してみたら、その中にも何点かウスゲにあたると思われるものがでてきました。

これは、案外普通にあるものかもしれないと、野外でも探してみると、水田の雑草としてチョウジタデとよく一緒に生えていることがわかりました。

野外では、花卉が大きいので花がよく目立つこと、植物体全体に赤みが少ないことも、見分けるポイントになります。湘南ブロックでは、今のところ、芽ヶ崎-1、寒川、平塚-1、小田原-3の4メッシュで記録されましたが、まだまだほかにもありそうです。それにしても、こんなに普通の種類がなゼリストからもれていたのだろうと、不思議に感じています。

(浜口哲一)



酒匂川下流を歩く

8月31日、くもり。仕事で真鶴へ行った帰り、鴨宮で降り、植物採集をすることにする。今春、小田原-3というメッシュを担当してから7回目の調査である。この前の調査が7月中旬だったので、道を歩いていても未採集の秋の花がかなり咲き出している。空き地でヒメムカシヨモギ、ブタクサ、ススキ、オトコヨモギ、庭先でコメヒシバ、トキンソウなどを採りながら酒匂川へ向かう。

途中一ヶ所の休耕地があり、ホンバヒメミノハギ、タカサブロウ、マツバイ、キカシグサなど休耕地の常連を見つける。アメリカアゼナも多く、アゼナよりは大きな株によく目立つ白い花をつけている。

酒匂川の土手に出ると、オオブタクサが見上げるほどに生長し、風にゆれると黄色い花粉をさかんに吐き出していた。8月の台風の増水はそれほどでもなかったらしく、ヨシがやや傾いたなという程度である。川岸の湿地に降り、コガマやヒメガマを押し分けて歩いていく。ここは6月に来た時にタコノアシを見つけておいたところだ。その時はまだ芽生えだったので採集しなかった。そろそろ花があるのではという予感にあたって、文字通りタコの足のような花序を開いていた。この湿地ではカワラスガナ、アゼガヤツリ、それに帰化種で後日名前がわかったキングヤツリも見つけることができた。

砂礫の川原に出ると、キササゲが逸出しているのを見つけた。キササゲというと社寺にある大木というイメージがあるが、川原に芽生えた50cmくらいの木にも実がたくさんになっているのが印象的だった。土手を見ると一面の紫の花、近寄ってみるとツルフジバカマの群生だった。近くにはカワラケツメイも花をさかせていた。

酒匂川をはなれ、鴨宮へもどる。人家の庭先をのぞきこむように歩いて、何軒目かで、ミチミタガラシをみつけた。ある、とにらんだ環境にその種類があると、うれしいものである。駅の近くの空き地にヤブツルアズキを見に行く。これも前に葉だけは見ておいたものだ。ヤブツルアズキのように特徴のあるものだったら、葉だけでも証拠の標本にはなるのだろうか、やはり花や実のあるよい標本を集めていかないと、不十分な情報しか積み重ねられないのではないのだろうか。もう花が咲いているかとか同じ場所に何度も通ううちに、副産物としていろいろな収穫があるというのもよく体験することだ。

約2時間あるいて一回りしたが、まだ日が高いので、少し足をのばしてみることにする。国鉄に沿って国府津の方へ行くと用水路があり、市街地の中に小面積の水田が残されていた。一区画が休耕されていたので入っていってみると、あぜ道にクサネムが生えていた。野生のものは初めてみるものだ。あたりを見回すと、ここでは休耕した田んぼ一面にクサネムが群生していた。おっくうがらずにあちこちのぞいてみるといいことがある、と痛感する。クサネムは一本抜いて袋に納めようとする、もう複葉をたたんでしまっている。これは面白いと、生えているものの葉を手でさわると、オジギソウほど敏感ではないが、見ている間に葉が閉じてしまう。野生の種類で接触刺激に対してこんなに敏感な就眠運動をする植物は初めて見た。

線路沿いの空き地を見ながら駅にとって返す。空き地で見つけたヤナギハナガサがこの日最後の収穫だった。約3時間歩いて、新たに約50種がリストに加わり、まあまあの成果をあげた半日だった。(浜口哲一)

湘南ブロック・ニューフェース紹介

1983年の調査で、ブロック内の初記録種がいくつか見つかりました。その主だったものを紹介してみます。

コウキクサ (NAK)

中井町の井の口に蔽島神社自然環境保全地域という所があります。ここはかつての水田だった所が湿地になり、その中央に島のように神社があるおもしろい環境で、ゲンジボタルが発生しています。5月24日に、ホタルの保護に取り組んでおられる地元の武繁春さん野案内で現地を訪れた際、古い用水池の水面をびっしりとうめた小型のコウキクサを採集しておきました。アオウキクサとばかり思っていたのですが、標本にしてからよく見ると、葉の裏が紫色をしており、これはということで県立博物館に持ち込みました。結果は、コウキクサという帰化種とわかりました。

シロバナヘビイチゴ (HAT-1)

アブローチに時間のかかるHAT-1のメッシュはどうしても調査回数が多くなりがちで、今年も春2回、秋2回歩いただけでした。しかし、各回ともかなりの収穫があり、6月1日に鍋割山に登った時は、山道沿いでシロバナヘビイチゴの花を見いだしました。実のおいしいこ

の草、高い山では何回となく見たことがあるのですが、丹沢では初めてで、感激しました。この日はほかにユキザサ・モリイバラ・コケイランなども初記録でした。

アゼガヤ (OD-3)

OD-3のメッシュは丘陵地のほとんどがミカン畑で、舗装された農地ばかり歩くことになり、地図で見る印象よりは調査のしづらい所です。7月11日、御殿場線の上大井駅から歩き出し、曾我山の一画を一回りしました。それなりの収穫をあげて帰路を急いでいた時、ミカン畑のすみに生えたひとむらのイネ科植物に目がいきましました。トダシバをやさしくしたような感じで、変異の多いトダシバにはさんざんだまされているので、今度もまたトダシバだろうと、先を急ぐまま詳しく観察もせず標本を袋に入れておきました。ところが、帰ってからルーペでよく見ると、トダシバとは花のつくりが全然違って、別物とわかりました。さっそく調べてみると答はアゼガヤ、図鑑で見ると普通になりそうなのですが、初記録でした。

タチコメグサ (HAT-1)

9月7日にヤビツ峠から三の塔に登りました。この時は足を痛めていたので長い距離を歩けるコンディションではなく、二の塔、三の塔の山頂付近を丹念に見て回ることにしました。二の塔の山小屋の焼け跡では、ハハコグサ・ダンドボロギク・カモジグサなど人里の植物をいろいろ見つけ、三の塔頂上のつち止め工事をした所ではオオアワガエリに混じって生えたシラゲガヤに気づきました。そのあとで、赤土のガレ場を上り下りしながら見て回ったところ、1ヶ所にまとまって生えた数本のタチコメグサを見いだしました。この種は草原にも生え、草丈がかなり高くなるそうですが、ガレ場の裸地のためかわずか10cmくらいの高さしかありませんでした。この日はほかにヒトツバシヨウマ・クサアジサイも記録しました。

ハグロソウ (HAT-4)

10月14日、自転車をころがしてHAT-4の調査に出かけました。このメッシュに自転車で行ったのは初めてでしたが、自宅から約50分でメッシュに入り、思ったより近いなと思いました。堀川、三廻部下の四十八瀬川、洪川、千村と回り、最後に峠トンネルへの急坂を自転車を押して峠部落に向かいました。前からあることは知っていたのに標本を作っていないオオ

アカウキクサを手に入れ、その後もうひとがんばりと部落の南の谷へ入ってみることにしました。部落のはずれの牛小屋の近くで、シャクチリソバとマルバルコウソウが野生化しているのを見つけ、さらに谷への道を進むと、道ばたに見慣れない草がありました。もう花期は過ぎていますが、貝がらのような目立つ苞はハグロソウに違いありません。もうひとがんばりと足を伸ばしてよかったと痛感したことでした。この時は部落に近い所でもあり、あるいは人為的に持ち込まれたものとも考えましたが、10月31日には東隣りの栃窪のスギ林でも相当数の本種が生えているのを見つけ、自生を確認しました。

ゴヨウマツ (OY)

10月19日、ほかの用事で大山の山頂迄まで行く機会がありました。湘南ブロックではOYのメッシュだけで未記録の種が10種あまりあり、ついでにそのいくつかでも見つけられればという目論見もある大山行でした。当日は朝からあいにくの雨となり、かけ足で山頂をようやく往復したという感じで、全メッシュの記録の達成はフジとスギの2種に留まりました。しかし、思わぬ収穫はあるもので、山頂の神社のそばで1株のゴヨウマツを見つけました。高さ1mあまりの幼木で、笹やぶに埋もれるように生えていましたから、自生のものと思いますが、場所が場所だけに、あるいは誰かが神社への寄進として植えたものかとも思えます。今後、注意して、大きな木を見つけ、自生であることを確認したいところです。

コゴメカゼクサ (O1)

10月27日、守矢先生をはじめ、三輪、齋藤、齊木、山口それに浜口の6名で、大井町、中井町の調査に出かけました。齊木、山口、浜口で大井町を受け持ち、高尾周辺の探索を行いました。今年調査を始めたばかりのメッシュなので、かなり宿題が多く残っていて、100種採集を目標にがんばってみました。畑、雑木林、スギ林、部落回りなど、いろいろな環境を見て再びバス道路にもどり、今度は反対側の谷に入ってみようと歩き出した時、道沿いの畑でおもしろいものを見つけました。高さ20cm弱の小さなイネ科植物で、小穂も小さく、それが赤味を帯びてたいへん美しいのが特徴です。帰りのバスでも、何だろうとひとしきり話題になりましたが、後で調べてみるとコゴメカゼクサであることがわかりました。畑の雑草としてたった1株見つけたこの草、なぜあそこにあったのか興味は

尽きないところです。ちなみに、当日O Iのメッシュで採集したのは、目標をわずかに下回る87種でした。

(平塚市 浜口哲一)

ツチアケビ (HAT-3)

10月3日、蓑毛から阿夫利神社へ向かう蓑毛道沿いの林道で、見事なツチアケビを見つけました。赤くて太い大きな実、標本にはどうかと証拠の写真を撮り、3個程を柄につけたまま採ってきました。帰宅後、実の半分をナイフでそり落として、他の植物と一緒に乾燥器で乾仕上げましたところ、そのままの色で標本が出来上り、証拠の写真は不要になりました。

ヤナギスブタ (HAT-3)

10月20日、名古屋方面の未調査の地域に入りました。金目川支流の深くえぐられた谷間沿いの水田の畔で、ふと見かけたタウコギを採集しようとして見まわしたイネの株間から見えた水中に、何やら小草らしいものが見え、よく見ると細い花梗が水中から出て、小さい花をつけていました。初めて見る水草でしたが、あとで調べてヤナギスブタであることがわかりました。ミズオオバコも一緒に付近に10数種もありました。水田中、この2種があったのは僅か数坪のこの水田1枚だけでした。

HAT-3の調査は10月には4回行い、帰化植物のザボンソウはじめ、ウメバチソウ・キセウタ・ミヤマノキシノブ・ウシクグなど70種ほどの収穫がありましたので、このメッシュも800種を超えることができました。

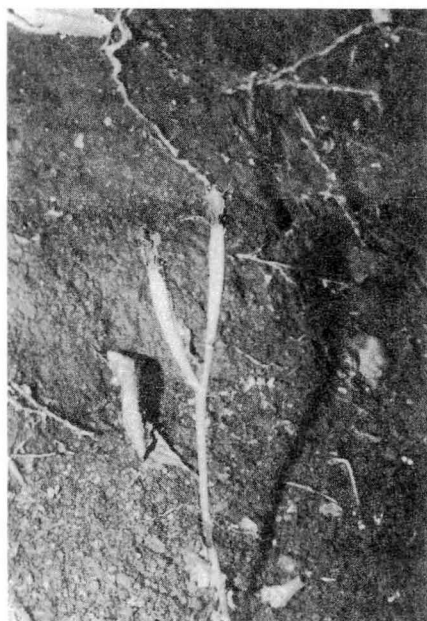
(平塚市 守矢淳一)



ミズニラ 1983.8.13 厚木市中萩野〔諏訪〕

(2) 1983年8月13日、厚木市中萩野の休耕田および、これより1 kmほど離れた水田の縁の2ヶ所に生育するのを発見。前者について標本の作成および写真撮影をした。

2. サガミラン *Cymbidium nipponicum* Makino form. *aberrans*



サガミラン 1983.8.3 座間市下栗野〔諏訪〕

県央の植物二題

1. ミズニラ *Isoetes japonica* A. Br.

(1) 1980年10月12日、座間市入谷の湿地で高橋秀男氏によって発見され、同行の諏訪哲夫・藤野知弘が標本を作成した。この湿地は、湧水を水源とした水田であったが、中心部は長年にわたって耕作されずにいるためヨシ群落になっている。ミズニラはヨシ群落の縁(へり)および休耕田のわずかな流れのある近くに生育するのが観察された。1981年8月25日、写真撮影(諏訪)。

1981年、座間市下栗原のコナラ・エゴノキなどからなる雑木林の崖下で渡辺睦男氏（座間市立野台在住）によって発見され、同じ場所で1982年、1983年にも観察された。1983年は2個体の生育のみであったが、6月30日蕾（渡辺撮影）、7月17～18日花（渡辺・座間市教育委員会植松撮影）、8月3日花後（諏訪撮影）の記録をした。標本の作成はない。花茎は小さい個体で7cm、花1箇。大きい個体の花茎は13cm、花2箇。蕾および花は帯緑色であった。

種名の同定に当たっては、誠文堂新光社の羽根井氏並びに県立博物館高橋秀男氏よりご教示頂いた。厚く御礼を申し上げる次第である。

文献

(1) 諏訪哲夫 1983 座間市の植物, 座間市教育委員会.

(2) 柳川定春・高橋秀男・大場達之 1981 神奈川県のマヤラン類, 神奈川自然資料(2).

(3) 前川文夫 1971 原色日本のラン, 誠文堂新光社.

(諏訪哲夫)

神奈川県のカタバミ類

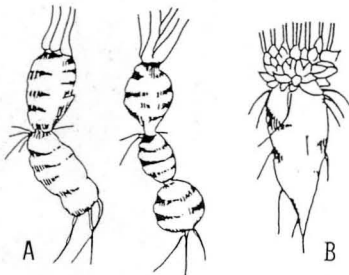
1. *Oxalis articulata* tSavigny

フシネハナカタバミ

根に節があるので引き抜いて見ると容易に識別できるが、花の中心部の色が濃いのもよい特徴になる。海岸の砂地や道ばたなどに生える。南アメリカ原産。

2. *O. bowieana* Lodd. ハナカタバミ

花は径3cmほどあり、葉も大型である。南アフリカ原産。



第2図 A. フシネハナカタバミ B. ムラサキカタバミ

3. *O. corniculata* Linn.
var. *corniculata*
form. *corniculata*

カタバミ

	カタバミ	エゾタチカタバミ
根	垂直に伸びて肥厚する	細く、地下茎は細長い
地上茎	匍匐する	直立または斜上
托葉	耳状で明瞭	不明瞭
花の数	1-8	1-3

form. *rubrifolia* (Makino) Hara

アカカタバミ

茎や葉は赤紫色、花卉の基部付近は赤色となる。

form. *tropaeaealioides* (Schlacht.)

R. Knuth ウスアカカタバミ

前品種に比べ全体が色の薄い一型。

form. *plena* Satake ホシザキカタバミ 重弁花。

var. *trichocaulon* Lev. ケカタバミ

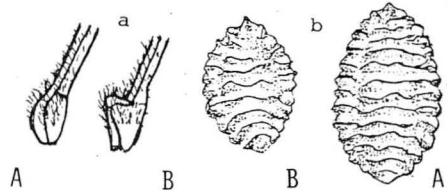
海岸型で全体に毛が多く、葉の表面にも毛がある。県内では今のところ真鶴岬に知られるのみである。本変種の重弁花も知られる。

4. *O. corymbosa* DC. ムラサキカタバミ

根の回りにある子球で増え、強害草である。南アメリカ原産で、観賞植物として移入したものが逸出した。

5. *O. fontata* Bunge エゾタチカタバミ

山地に多く見られるが三浦半島にも分布する。カタバミとの区別点は托葉に注目して観察するのがよい。



第1図 A. エゾタチカタバミ B. カタバミ

a. 托葉 b. 種子

(原寛:日本のカタバミに就て, Journ. Jap. Bot. Vol. XXIV Nos. 1-12より)

6. *O. griffithii* Edgew. et Hook. fil.
var. *kantoensis* (Terao)

T. Shimizu

(*O. acetosella* L. ssp. *griffithii*

(Edgew. et Hook. fil.) Hara

var. *kantoensis* Terao)

カントウミヤマカタバミ

	ミヤマカタバミ	カントウ ミヤマカタバミ
果実	楕円形 長さ10-17 mm	卵球形 長さ6-12 mm
葉裏	密に軟毛がある	毛は少ない
分布	東北地方南部から中国地方・ 四国	関東地方南西部・ 東海地方東部・ 伊豆半島

(高橋秀男)

木曜会の継続実施について

毎週木曜日に標本の仕分け(分類)作業を兼ねて勉強会を行なっていますが、明年も引き続き実施いたします。ご協力いただける方には下記の実施の日に博物館の地下作業室へおいで下さい。午後1時から午後4時までとじていますが、とくに時間の制約はありませんし、また日時の変更も可能です。

入館に際しては博物館地下サービスヤードの守衛さんに植物誌調査会の用件で来館した旨を告げ、名札をもらってから入館してください。開催の予定は次の通りです。

1月—19日、26日

2月—2日、9日、16日、23日

3月—1日、8日、15日、22日、29日

なお、9月から12月にかけては、横浜地区の吉川アサ子・平松俊子・内藤美知子、海老名町の蒔田かをる・森百合子の皆さんのご協力を得ました。

植物誌編さん今後の予定

第2回仮目録印刷までは次のような日程で進めたいと考えております。

1月14日(土)午後2時より役員会。

(博物館応接室)

今後の方針を定めます。(通知は別にさしあげませんが役員の方はよろしく)。

2月末日 各ブロックのデータを集計する。

3月末日 第2回仮目録発行。

4月初旬 総会開催。

標本鑑定会のお知らせ

次の日程で難しいグループの標本鑑定会を開催いたします。県博、横須賀市博、平塚市博に納められている標本を中心に同定していただく予定ですが、関連の標本がありましたら当日お持ち下さい。もし当日出席できない方は前もって博物館の方へ標本を届けておいて下さい。

シダ植物の鑑定会

日時 1月21日(土)午後1時30分—4時

場所 博物館応接室

(受付で標本鑑定会に来館した旨を告げて入館して下さい。)

講師 国立科学博物館 中池敏之先生

ヤブマオ属の鑑定会

日時 1月28日(土)午後1時30分—4時

場所 博物館応接室

講師 東京大学理学部附属植物園

矢原徹一先生

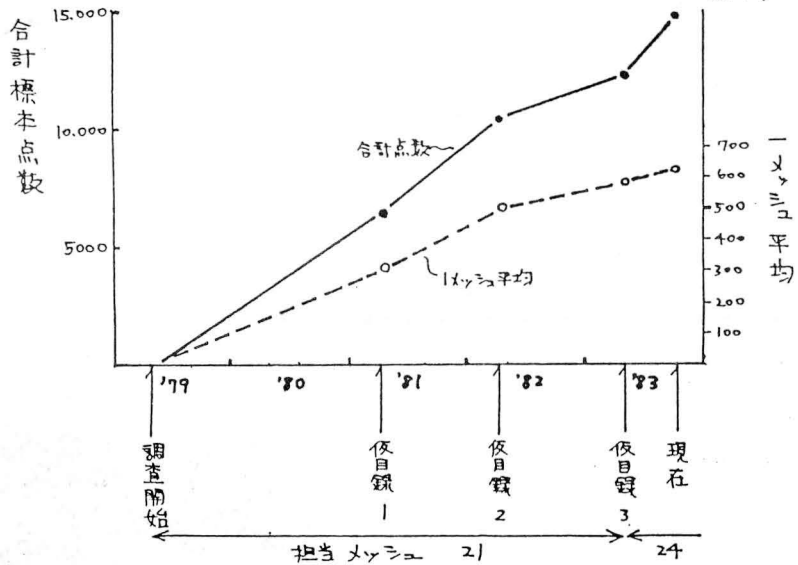
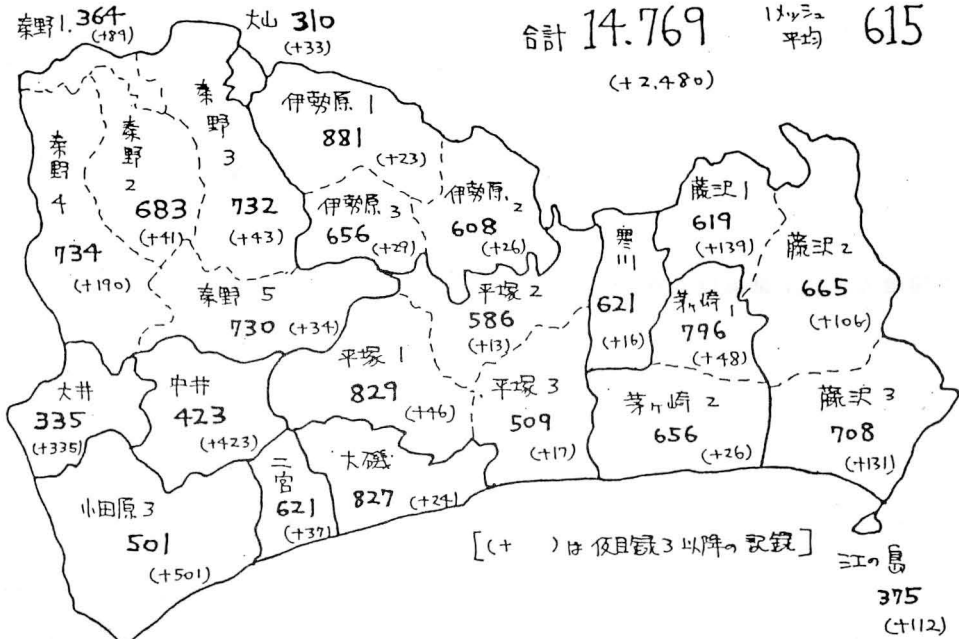
重点地区調査その後

- 第6回 8月30日 箱根芦ノ湖および周辺
- 第7回 9月4日 開成町—最乗寺
- 第8回 9月23日 南足柄市地藏堂、夕日の滝周辺
- 第9回 9月25日 清川村塩水林道—本谷
- 第10回 10月9日 清川村早戸川
- 第11回 11月23日 小田原市早川、入生田、塔ノ沢

*ご協力下さった方々は第5回までの参加者が中心です。



第5回の調査参加者(箱根丸岳頂上にて)



* 24メッシュすべてで記録された種

- イヌワラビ・カモジグサ・ヤマカモジグサ・カモガヤ・トボシガラ・ホウチャクソウ・サルトリイバラ・ヤマグワ・ミズヒキ・タケニグサ・ウツギ・ツルウメモドキ・ミツバ・ミズキ・ムラサキシキブ・クサギ・オオバコ・ガマズミ・フキ・セイヨウタンポポ

以上20種